

4

芽（学びの仕組み）

子どもたちの成長も、地域の学びも、一度に大きく変わるものではありません。小さな芽が季節ごとに姿を変えながら育っていくように、国見町の教育も、日々の実践と気づきの積み重ねの中で少しずつ形をつくります。

本章では、その成長を支える仕組みを「芽」にたとえました。

学校・地域・行政がともにこの芽を見守り、育て、次の世代へつないでいきます。

芽（次世代・学びの仕組み）



「学びの仕組み」

国見の教育ビジョンは、子どもたちの学びを“その場限りの成果”ではなく、**日々の変化が積み重なっていく連続した流れ**として捉えています。前に進む日もあれば、立ち止まる日もあり、そのすべてが**学びの軌跡として大切な意味**を持ちます。

この章で扱う「学びの仕組み」とは、そうした連続する学びを丁寧に見取り、次につなげていくための考え方と仕掛けです。

短期的な成果の比較や評価ではなく、学びがどのように深まり、広がり、次の学びへと結びついていくのかを共有し、よりよい学びの環境づくりに生かしていきます。

国見町では、この仕組みを「管理」や「評価」のためのものではなく、子どもたちの**学びが続いていくように支える視点**として位置づけています。学校と行政が同じまなざしで変化を受けとめ、ともに考え、ともに育てていくことで、学びの流れが途切れず、次の探究や挑戦へとつながっていきます。

本章では、この「学びの仕組み」を軸に、国見町がどのような視点で学びを支えていくのかを整理します。

4-1 「学びの仕組み」の考え方

■ 学びをとらえる2つのまなざし

子どもたちの学びは、計画通りに直線的に進むものではありません。授業での気づき、友人関係、学校の雰囲気、家庭での経験など、さまざまな要因によって日々変化し、広がり方や深まり方も異なります。一方で、行政には教育の方向性を整理し、取り組みの土台を整え、必要な施策を継続的に支える役割があります。こうした教育の特性と行政の役割の両方を生かすため、国見町では「PDCA」と「OODA」という2つの視点を、学びをつなぎ支える基盤として位置づけています。

■ PDCA の役割（教育委員会）

PDCA は、取り組みの方向性を整え、振り返りと改善を通して教育施策を継続的に高めていくための視点です。目指す姿を共有し、**取り組みの土台を形づくる役割**を果たします。

■ OODA の役割（学校・地域）

一方の OODA は、子どもたちの「今」の姿を丁寧に捉え、必要な支援や関わり方を柔軟に選んでいくための視点です。

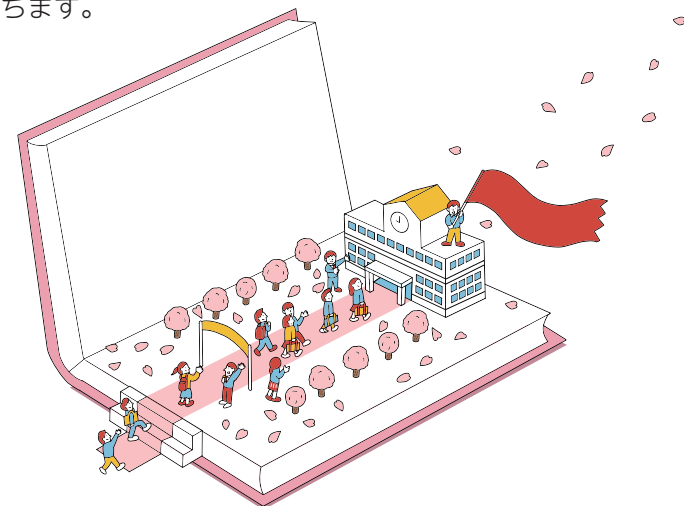
表情やつまずき、小さな変化を観察し、その意味を考え、今必要な関わりを判断し、行動につなげます。

授業や生活の中で生まれる変化を見逃さず、学びをその場で支える役割を担います。

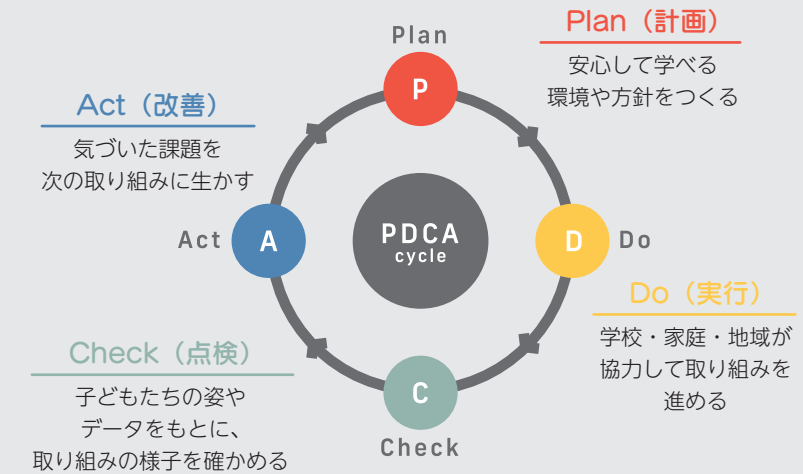
■ 2つの循環のつなぎ方

「国見の教育ビジョン」の進捗管理は、この2つの視点を対立ではなく**補完関係**として扱っています。

PDCA が教育の方向性や土台を整え、OODA が日々の変化を受けとめて支える。この2つの循環によって、学校と行政が同じ歩調で学びを支え、単年度で切り離されない“学びの仕組み”を生み出します。2つの視点を組み合わせることで、子どもたちの**変化を尊重しながら、教育の積み重ねを確かなものにしていく仕組み**が成り立ちます。

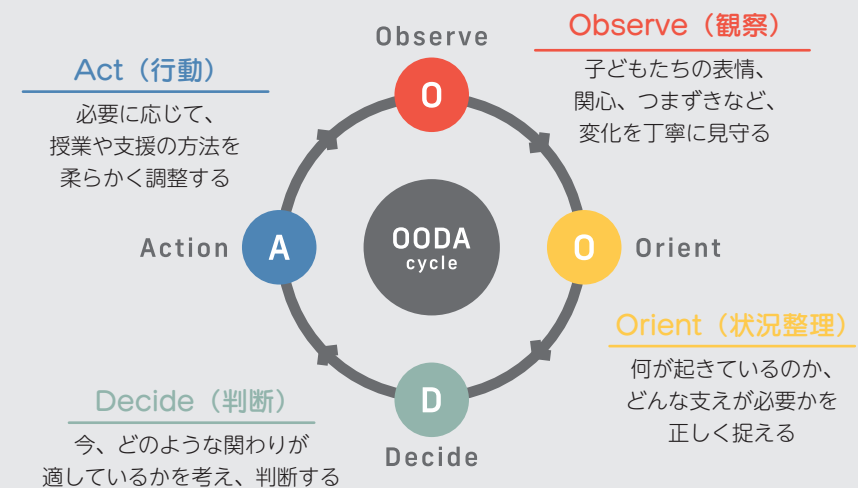


PDCA サイクル（教育委員会）



補完関係

OODA ループ（学校・地域）



4-2 「学びの仕組み」を支える循環のかたち

「国見の教育ビジョン」は、学校と行政が学びの様子を共有し、必要な支えを重ねていく「循環」を大切にしています。これは、特定の時期や年度だけに限定されるものではなく、日々の気づきや課題に継続的に向き合い、それらを次の取り組みに生かしていく流れです。

学校で見てきた子どもたちの変化は、教育委員会との対話につながり、必要な整備や重点化を生み出します。

そして、その整えられた環境が国見町の学びを支え、新たな挑戦や広がりを可能にします。

この循環が続くことで、学びの流れは途切れず、次へとつながっていきます。

